

【2017/2/17 経済学部ワークショップの様相】

《ワークショップ ReD》

『プロパガンダ・ポスターにみる日本の戦争』について

青梅市立美術館学芸員 田島奈都子

2017年2月17日開催の滋賀大学経済学部ワークショップ ReD は、公益財団法人陵水学術後援会による地域貢献のための支援事業として、また、同年1月30日に始まった、しがだい資料展示コーナー企画展「鳥のよ—鳥瞰図から1世紀前のアジアへ」関連イベントとして開かれた。講師には、青梅市立美術館学芸員の田



島奈都子さんをお招きした。田島さんは、昨2016年に勉誠出版から刊行された『プロパガンダ・ポスターにみる日本の戦争—135枚が映し出す真実』の編者であり、同書でとりあげられた、いわゆる十五年戦争期(1931年～1945年)のプロパガンダ・ポスターの披露と解説がご講演の内容だった。

十代のわたしにとって、キャンディーズのポスターは、最高の宝ものだった。ずうーっとたいせつに持ちつづけているとすこしも疑わなかったのに、いつのまにか、あのシングル盤「微笑がえし」(1978年)のジャケット写真とおなじポスターが、わたしの手許から消えてしまった。もはやいつ捨てたのかも覚えていない。ポスターとは、そういうものかもしれない。

「戦時体制の強化と継続を強力に推し進め」「時代の証言者」となりえる存在」だったからこそ、戦時のプロパガンダ・ポスターは、敵の空襲によるというよりも、当局の手によって戦時が終わると廃棄されてしまうこととなった。消えるべくして消え、忘れられてしまいつつも、長野県阿智村に残った稀有な135枚の戦時プロパガンダ・ポスターをとおして、「戦時期の一般国民が何を知り、何を信じこまされていたかを、同時代の生活史料であるポスターを概観することによって明らかにしようとする」同書編者の試みは重要である。

ただその一方で、「135枚が映し出す真実」というとき、また、「モチーフ(図柄)は“象徴”として繰り返し使用されることで、プロパガンダの色彩を色濃くし、見る者に対する訴求力を強めていった」と説かれるとき、たとえば、ポスターに象徴として描かれた「国の最高峰」であるという富士山は、20世紀前期において、なにをあらわしたこととなるのだろうか。一説に3952mとされるかつての新高山(玉山)は、台湾にありながらもその領有後は日本一の山になってしまった。だから、にいたか山なのだが。依然として十五年戦争期に日本の象徴として描かれる山である富士は、現実のなにを映し出しているのか、いないのか。わたしたちの図像をめぐるリテラシをもっともっと鍛えてゆくと、ヴィジュアルなものにひろがる世界が違ってみえてくるだろう。



このワークショップには、学外から20名をこえる方々がお集まりくださった。事前の新聞報道のお蔭だろうし、また、戦時プロパガンダ・ポスターへの関心の高さをあらわしてもいよう。(阿部安成)

参考: 勉誠出版ホームページ http://bensei.jp/?main_page=wordpress&p=8337